

KANSAI\*OSAKA

# 文化力

No.140

2023/AUTUMN・秋

公益財団法人

関西・大阪21世紀協会

## 特集 文楽界に新風

人形浄瑠璃文楽座 人形遣い 吉田玉翔さんに聞く

「文楽夢想継承伝」が目指すこと

・ Osaka Directory (大阪中之島美術館プロジェクト)

・ 学校アートプログラム (文化芸術による次世代育成事業)

トッピンタビユー 企業と文化

土井伸宏氏 (株式会社京都銀行代表取締役会長)

ニューノーマル時代のアーティストたち

能楽囃子ユニット「ナニワノヲト」

助成事業紹介

日本万国博覧会記念基金

(2023年度助成金および奨学金贈呈式&事例発表会)

アーツサポート関西

(トヨタモビリティ新大阪ASK支援寄金助成ほか)

令和4年度 大阪文化祭賞 贈呈

村瀬先生の「ぶらり歴史歩き」大阪城編

開催レポート

MUFG Kids Program

(関西・大阪21世紀協会 架け橋事業)

住吉大社 御田植神事

関西から

文化力  
POWER OF CULTURE

表紙: 吉田玉翔さん(文楽座人形遣い)と  
いがみの権太(義経千本桜)人形  
(国立文楽劇場前で)





『五条橋』の弁慶役を務める吉田玉翔さん  
(2023年6月17日・国立文楽劇場「第40回文楽鑑賞教室」)

特集

## 文楽界に新風 ベテランと若手が同格で共演

人形浄瑠璃文楽座人形遣い よし たましよう 吉田玉翔さんに聞く  
「文楽夢想 継承伝」が目指すこと

大阪発祥で300年以上の歴史をもつ伝統芸能「人形浄瑠璃 文楽」。今年、その文楽で前代未聞といわれた公演が3年目を迎えた。師匠と弟子が揃って顔を出し、主遣いとして“共演”する「文楽夢想 継承伝」だ。企画したのは文楽座人形遣いの中堅・吉田玉翔さん(48)。主遣いになるには20年以上もの修業が必要とされる人形遣いの世界にあって、玉翔さんがあえて“掟破り”に挑んだ思いとは一。



吉田玉翔さん

人形浄瑠璃文楽座人形遣い、文楽夢想実行委員会大都督 だいたとく

高知県土佐清水市出身。1993年初代吉田玉男さんに入門(文楽協会研究生)、1995年初舞台。文楽協会賞(2014年)、大阪文化祭奨励賞(2022年)、第42回国立劇場文楽賞奨励賞(同年)など受賞。国立文楽劇場、国立劇場での公演、文楽協会での地方公演、海外公演のほか、2000年より高知で「翔の会」を立ち上げ定期的に公演を開催。能・狂言・落語・オペラなどとのコラボレーションや小中学生への文楽人形の指導も行い、文楽の普及に努める。2019年高知県土佐清水市観光大使に就任。2021年「文楽夢想 継承伝」を立ち上げる。料理やお菓子づくりはプロ級の腕前で、Instagramに多数アップ。



## 若手の気持ち

きっかけはコロナ禍だった。2020年3月、大阪府が「週末の大阪・兵庫往来自粛」を呼びかけ、国は東京、大阪など7都府県に初の緊急事態宣言(4月7日～5月25日)を発令。人々はワクチンも治療薬もない不安に怯え、「3密回避」「不要不急の外出自粛」が日常となった。やがて全国各地のコンサートホールや劇場が次々に上演を中止。国立文楽劇場(大阪)でも、同年4月から9月まで半年間におよぶ休演が続いた。

「これだけ長い期間休んだことは、かつてないことでした。何もしない日々が続くと、一体この先どうなるんやろうという不安な気持ちが高まってきます。それは文楽に携わる誰もが感じていたことでした。人形遣いとしては、何か月も人形に触れず、体を動かさずにいると体力的にも不安になってきます。そこで、桐竹勘十郎師匠や吉田玉男師匠たちに相談して、8月に入ると若い芸員たちも含めて自主稽古をはじめました。そこで師匠の方々と、今は何より若手の気持ちを盛り上げていかなくてはならないという話が出ました」

文楽人形は、より人間らしい動きや感情を表現するために、人形一体を主遣い(頭部と右手を操作する中心的な役割)、左遣い(左手の動作担当)、足遣い(足の動作担当)の三人で操る。“足10年、左10年”といわれるように、主遣いを任されるまで長い修業期間が必要とされる奥深い世界。しかも芸員に定年はなく、近年は高齢化に加えて文楽研修生として入門する若者が減り、この期間が長くなる傾向にある。今年6月の「文楽若手会」で『義経千本桜(いがみの権太役)』に出演した玉翔さんですら、この道30年にして“若手”といわれるほどである。

「中堅クラスでも難しい役を、いきなり若い人にやらせるのはどうかと思いますが、ときにはそういう人たちをメインにした公演があってもいいんじゃないか。若手の気持ちを盛り上げることは、文楽全体の盛り上げにつながりますからね」

玉翔さんは、主遣いのチャンスが遠い後輩たちがストレスを溜める気持ちは分かるという。しかもコロナ禍で公演がなくなり、若手芸員の成長の機会が減ることを危惧する師匠たちも、若手がモチベーションを保つことは、ますます大事になっていると感じていた。

## 自分たちが楽しんでこそ

「普段は黒衣に頭巾を被って出ている入門10～15年の若手が、師匠と同じように紋付袴姿で顔を出し、一生懸命に主遣いをする姿をお見せすることで、お客さまにも楽しんでもらえるのではないかな。何より自分たちが楽しんでやっている姿をお見せしないことには、お客さまにも楽しんでもらえないんじゃないかなと思って、自分たちが観たい舞台、自分たちがやりたい役をやってみようと考えたんです」

師匠(ベテラン)と弟子(若手)が同等の主遣いとして出演する『文楽夢想 継承伝』の自主公演を思いついた玉翔さんは、早速師匠たちに協力を持ちかけた。前例がなく捻破りともいうべき企画に、師匠たちは当初面食らっていたが、意図を説明すると“それは面白い”と一肌脱いでくれた。「僕たちは三人で一つの人形を遣いますから、お互い



に協力してやっていこうという気持ちが強い。人形遣い同士はアットホームな感じですよ」と玉翔さんはいう。

通常、国立文楽劇場が主催する公演は劇場が演目や配役を決めるが、自主公演となると、そうした制約は一切ない。とはいえ人形や大道具・小道具類は全て国立文楽劇場の所有であるため、それらの使用料を支払わなければならない。文楽協会所属の芸員といえども優遇されることはない。加えて劇場の使用料、チラシの印刷代、出演者(太夫、三味線、人形遣い)やスタッフの人件費なども自腹で、一度の公演に数百万円かかることもある。

そこで2021年、玉翔さんが中心となって「文楽夢想実行委員会」を立ち上げ、アーツサポート関西からの助成(70万円)を受けるとともに、初めてクラウドファンディング(CF)で公演資金を募った。支援者に対するリターン(特典)は、桐竹勘十郎さんの直筆イラストや吉田玉男さんによる文楽解説教室付き観覧チケット、出演者と歓談できるオンライン後夜祭への参加、出演者のサイン付き手形色紙や限定動画DVDなど、文楽ファンにとっては垂涎の品々ばかり。そうして30万円の目標をはるかに超える350万円近くの支援が寄せられ、芸員たちは、文楽ファンの心遣いに感極まった。若手にとって夢の師弟共演が、こうして実現したのである。

## 温かい眼差し

2021年8月7日、国立文楽劇場。師匠で人間国宝の桐竹勘十郎さんと弟子の桐竹勘介さん(2009年入門)による『二人三番叟』に続いて、『傾城阿波の鳴門 順礼歌の段』では、お弓役を父である吉田一輔さん、おつる役を息子の吉田養彦さん(2013年入門)が務めた。また『五条橋』では、師匠の吉田玉男さんが牛若丸、弟子の吉田玉路さん



師匠の桐竹勘十郎さん(右)と弟子の桐竹勘介さん(左)による『二人三番叟』。玉翔さんは黒頭巾を被って勘介さんの左遣いを担当している。(2021年8月7日『文楽夢想 継承伝』にて)

(2011年入門)が弁慶役で登場。太夫や三味線も、主に芸歴10～15年の若手で固めた。

「僕は頭巾を被って勘十郎師匠や玉男師匠の左遣いに回りました。玉男師匠は牛若丸が初役でしたので、稽古中から“振り覚えてるかなあ”なんていいながら、いつもと違った雰囲気を楽しんでおられました。そういわれると一層しっかりサポートしなくてはいけないと思い、本番はいつもより緊張しましたね。弟子たちはもっと緊張した様子で、勘介君は額に大汗をかいて演じていました。僕が入門10年そこその頃に師匠や先輩と同等の役で出演するなんて想像もできませんでしたから、彼らが緊張する気持ちはよく分かります。お客さまは公演の趣旨をよくご理解いただいており、普段にも増して温かい目でご覧いただいているのが舞台の上まで伝わってきて、心地良かったです。やって良かったと思いました」

前代未聞の師弟共演が幕を閉じると、観客は文楽技芸員たちの新たな挑戦に大きな拍手でエールを送った。

## 二度と見られない光景

こうした活動が注目され、2022年1月24日、文楽夢想実行委員会に「2021年度 関西元気文化圏賞(特別賞)」が贈られた。文化によって日本を元気に明るくした人や団体に、関西元気文化圏推進協議会(松本正義会長)から感謝と今後一層の活躍を期待して贈呈されるものである。玉翔さんたちの取り組みが、「通常は見られない配役で若手の飛躍にもつながった。大阪発祥の伝統芸能の未来を見据えた取り組み」と高く評価されたのである。賞贈呈式では、公演中の玉翔さんに代わって登壇した鶴澤友之助さん(三味線/2002年入門)が、多くの人の支援に感謝を述べ「今後も日本そして世界に愛される文楽であるよう一層努力していきたい」と笑顔で語った。

好評を得た『文楽夢想 継承伝』は、翌2022年8月に第2回が開催された。このときは桐竹勘十郎さんや吉田玉男さんら重鎮がそれぞれの弟子の左遣いを担当するとあって、「今となっては二度と見ることができない光景」と、ファンをとくめかせた。このときもCFで公演資金を募り、目標額(100万円)の倍以上の支援が寄せられた。さらに今年9月26日には、第3回を東京の国立能楽堂で開催。玉翔さんは「今回はクラウドファンディングをしないので赤字覚悟ですが、若手の奮闘を東京のお客さ



文楽夢想 継承伝(東京公演)のチラシ

まにもぜひご覧いただきたいという思いで開催することにしました」という。

技芸員たちの熱い思いは、日本各地のファンの心にしっかり届いている。



吉田一輔さん(右)と吉田簗悠さん(左)による『傾城阿波の鳴門 順礼歌の段』(2021年8月7日『文楽夢想 継承伝』にて)

## 遊びに行く感覚

玉翔さんが初代吉田玉男さん(1919～2006年)に入門したのは1993年、18歳のとき。しかし、中学・高校時代は野球部で練習漬けの日々を送り、文楽とは縁がなかった。

「中学1年生のときに父を亡くしました。母もその寂しさを紛らわせたかったのか、毎月のように高知の自宅から大阪まで文楽を観に行っていました。もともと日本舞踊や歌舞伎などの伝統芸能が好きで、知り合いを通じて玉男師匠とも懇意にさせていただいていました。そんな母に連れられて、高校1年生のときに初めて文楽を観たんです。といってもストーリーや太夫さんの言葉は分からず、“玉男さんが出てきたら起こして”なんていって、ほとんど居眠りをしていましたけどね。それから3度くらい連れて行ってもらったかなあ…。やがて玉男師匠が楽屋に招いてくださったり、舞台の袖から観せてくださったり、人形を触らせてもらって、“お前、うまいがなあ”なんておだてられたりもしました。僕は、そうして遊ばせてくれる玉男師匠が好きでした。だから伝統芸能を鑑賞するというかしこまったものではなく、知り合いの人形遣いのおっちゃんのところへ遊びに行くという感覚で文楽と接していました」

転機は高校3年生のとき。料理をすることも好きだった玉翔さんは、卒業後は調理師の道に進もうと考え始めていた。しかし、そんな折に観た『俊寛』※や『夏祭浪花鑑』が心を動かした。

※『平家女護島～鬼界ヶ島の段』

## 優しかった師匠

「いいなあって思ったんです。とくに玉男師匠が遣う団七九郎兵衛(夏祭浪花鑑の主人公)が勢いよく走って引き込む場面では、足遣いをされていた(吉田)玉佳さんが息を切らせて小幕(出演者が舞台に出入りする幕)に突進してくる。それを見て、自分もやってみたいと思いました」

人形遣いにアスリートのような格好良さを感じた玉翔さんは、高校を卒業すると、迷うことなく初代吉田玉男さんの門を叩いた。

「玉男師匠はすでに70代半ばで、孫のような年齢で敬語もちゃんと話せないような僕にも、とても優しくしてくれました。それに甘えて、弟子になっても入門前のように“玉男さん”って呼んでいたら、“研究生になったんやから、そろそろ師匠って呼ばれへんか”ってやんわりいわれましたね。



2006年に玉男師匠が亡くなるまで、ずっと師匠の足遣いをやらせてもらいました。“道を歩いている人をよく観察しなさい。忙しそうだったり、暇そうだったり、歩き方に人の気持ちが表れている。いろんな人の歩き方を見て、それを舞台上で生かしなさい”ってよくいわれました。そんな玉男師匠は、何もしていないときは普通のおじいさんという感じでしたが、舞台に出てライトを浴びたとたん、スーパーマリオのように体がむくむくっと大きくなるように見えるんです。本当に。そして舞台に引き締まった緊張感が走る。それがとても格好良かった」

師匠と過ごしたのは10年間だったが、玉翔さんはいつも初代玉男さんのそばにいて人形遣いとしての心構えを学び、1997年10月には自身初の海外(フランス・パリ)公演も経験した。

## 受け継がれる想い

玉翔さんは、2022年6月の文楽若手会(大阪・東京)で『絵本太功記』の武智光秀を遣い、同年度の大阪文化祭奨励賞を受賞した。初舞台から27年目。主君を討った光秀の信念と苦悩を大きな迫力で表現し、立役を得意とする一門の伝統をしっかり継承したことが高く

評価された。

賞贈呈式に「これからも芸道精進して、新たなことに挑戦していきたい」とコメントを寄せた玉翔さんは、コロナ禍以前から、落語や狂言、オペラなどとのコラボレーション公演を積極的に行い、他のジャンルの観客に文楽の面白さを伝える活動も続けている。落語家の桂かい枝さんとのコラボレーション『落語×文楽 落楽パック』(2022年10月・天満天神繁昌亭)は、落語に合わせて玉翔さんが高座で人形を遣う趣向が受け、今年10月9日に玉翔さんの故郷・高知県土佐清水市でも開催される。「文楽夢想 継承伝」も、そうした新たな挑戦の一つである。

「玉男師匠は、あまり前例にとらわれずに、いろんなことをやってみようという思いの強い人で、僕もそんな師匠の姿勢が好きでした。僕自身、文楽一筋で脇目も振らず走り続ける中で経験したコロナ禍は、お客さまにもっと楽しんでいただくためにはどうするか、後輩たちがもっと熱く仕事に携わるにはどうすればいいかを、じっくり考える時間を与えてくれたように思います」

「文楽夢想 継承伝」には、文楽にかける技芸員たちの夢や想いに加え、先達のチャレンジ精神もしっかり継承されている。

(ライター 三上裕弘)



初代吉田玉男さん(左)の着付けを手伝う玉翔さん(右) (1997年)



初代吉田玉男さん(左)と入門1～2年頃の玉翔さん(右)



初代吉田玉男さん(左)と一緒に(1997年10月・フランス(パリ)公演時の食事会にて)



文楽若手会で『絵本太功記』の武智光秀を遣う吉田玉翔さん (2022年6月／国立文楽劇場、国立劇場)



「落語×文楽 落楽パック」での吉田玉翔さん(左)と桂かい枝さん(右) (2022年10月・天満天神繁昌亭／撮影：桂秀也)

(写真提供：文楽協会、吉田玉翔さん) 2023年6月17日／国立文楽劇場にて

令和5年度(第78回)文化庁芸術祭主催公演

## 11月文楽公演

国立文楽劇場・11月4日(土)～26日(日)

第1部 午前10時30分開演

双蝶々曲輪日記(ふたつちょうちゅうくるわにつき)  
堀江相撲場の段／難波裏喧嘩の段／八幡里引窓の段  
面売り(めんうり)

第2部 午後2時15分開演

奥州安達原(おうしゅうあだちがはら)  
朱雀堤の段／敷妙使者の段／矢の根の段／袖萩祭文の段／貞任物語の段

第3部 午後5時45分開演

近松門左衛門300回忌  
冥途の飛脚(めいどのひきやく)  
淡路町の段／封印切の段／道行相合ご

主催＝独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁



# 若手アーティストが育つ魅力ある大阪に

大阪中之島美術館×関西・大阪21世紀協会 共同企画

## Osaka Directory

supported by RICHARD MILLE

おおさかディレクトリ



|     |        |                               |
|-----|--------|-------------------------------|
| 第4期 | 小谷 くるみ | ／2023年11月18日(土)～12月17日(日)     |
| 第5期 | 肥後 亮祐  | ／2023年12月23日(土)～2024年1月21日(日) |
| 第6期 | 木原 結花  | ／2024年1月27日(土)～2月25日(日)       |

◆会場：大阪中之島美術館 2階多目的スペース(入場無料／ただし本企画のみ)

◆主催：大阪中之島美術館、公益財団法人 関西・大阪21世紀協会

◆supported by RICHARD MILLE

◆協賛：サントリーホールディングス株式会社、ロート製薬株式会社、大和証券株式会社、西日本電信電話株式会社、ダイキン工業株式会社、株式会社丹青社

関西・大阪21世紀協会は、文化の担い手を育てる活動のひとつとして、若手アーティストの発表の機会の提供や、創作活動の支援を行っています。昨年、当協会設立40周年記念事業として大阪中之島美術館と共同で「Osaka Directory supported by RICHARD MILLE」を開催し、約4万人の方が来場されました。

本展覧会は、関西ゆかりの若手アーティストの作品を個展形式で紹介するもので、今年度も3人のアーティストを取り上げています。プロジェクト名の「Directory」は、英語で「名鑑」、IT用語ではデータを保存するフォルダを

意味し、この展覧会を重ねていくことで、関西ゆかりの「アーティスト名鑑」になればとの思いが込められています。

当協会は、この取り組みを通して、関西・大阪のアートシーンを活性化し、若く才能あるアーティストが国内外へと飛躍する「アーティストが育ち、活躍する都市」への貢献を目指しています。今回紹介する3人は全員20代。これからの時代を象徴する新たな表現を生み出す新進気鋭のアーティストの世界観をぜひお楽しみください。

### 出展アーティスト コメント



撮影：Hanako Kimura

こ くに  
小谷 くるみ

第4期

2023年11月18日(土)～  
12月17日(日)

#### 存在の痕跡や気配に関心

“人は死の瞬間に体重が21g減る”という話を基にした《21gの存在》シリーズや、地中の堆積物を人類の痕跡とする《錆》シリーズなど、存在そのものではなく、その痕跡や気配といった不確かなものに惹かれて作品化しています。最近のメインテーマは“ヒトとは何か”。自分が作ってきたさまざまな作品を振り返ったときに、何かフワッと“小谷はこういうことを考えているのかもしれない”と伝われば最高だと思っています。人生初的美術館内でのソロエキシビジョンですので、間違いなく私の作家人生のターニングポイントになるでしょう。会場は、これまでのホワイトキューブ(周囲を壁で囲まれた展示空間)と

違って透明ガラスで外界と仕切れおり、その空間に合わせて組み立てる制作プロセスも新鮮で面白いと感じています。メインテーマは変わりませんが、場所とともに少し変化した新しい表現を披露できればと思っています。



《21g》2020年  
撮影：Gallery Nomart

#### プロフィール

1994年大阪府生まれ。2017年京都造形芸術大学油画コース卒業。2019年京都造形芸術大学大学院修士課程修了。主な展覧会歴は、個展「21gの存在」(枚方国際ゴルフ倶楽部、大阪／2018年)、京都造形芸術大学卒業制作選抜展「宇宙船地球号」(東京都美術館／2019年)、「大鬼の住む島」(WAITINGROOM、東京／同年)、個展「砂から星へ」(ギャラリーノマル、大阪／2021年)、Since 1989 NOMART —アーティスト×工房展—(銀座SIX、東京／2022年)、個展「ヘーパイストス」(ギャラリーノマル、大阪／同年)。





ひ ゴ リょうすけ  
**肥後 亮祐**

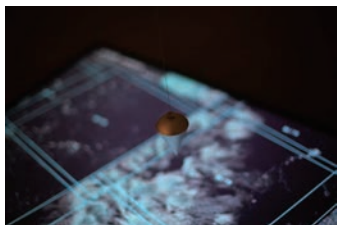
第5期

2023年12月23日(土)～  
2024年1月21日(日)

## 情報の盲点(遺物)を作品化

“Google Map上に誤記載された幻島”や“実在しない英単語”など、流通する情報の盲点を遺物と捉え、社会や個人が無自覚にまたは意図的に作り出す事象や状況を考察し制作してきました。コロナという大きな変化要因に対して、時代は新しさというよりはむしろ古いものへ回帰しているように感じました。近代以降に成立した制度やシステムに綻びのようなものを感じ、古い虚構が新しい虚構に取って代わっただけなのかもしれないという思いです。その意味で、近代以前のメディアに対する興味や、近代以後に成立した制度への系譜に対する関心が高まりました。

大阪中之島美術館については、建設される以前からどんな美術館になるのか注目していましたが、まさか自分が展示の機会を頂けるとは思いもしなかったので大変驚きました。展示会場はホワイトキューブと異なるパブリックな空間なので、その空間性を生かしながら作品の構成を考えたいと思っています。また、作者である私の意図しないところで、来場者どうしの偶然の居合わせのようなことが起こればいいと思っています。



《Sandy Island》「クリテリウム97 肥後亮祐」展示風景 2020年  
水戸芸術館現代美術ギャラリー 撮影：仲田絵美

### プロフィール

1995年北海道生まれ。現在、京都市立芸術大学大学院博士(後期)課程構想設計領域在学。主な展覧会歴は、「写真新世紀展2018」(東京都写真美術館、東京/2018年)、「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2019 KG+」(GALLERY Ann、京都/2019年)、個展「クリテリウム97 肥後亮祐」(水戸芸術館現代美術ギャラリー、茨城/2020年)。受賞歴は、「Kyoto Art for Tomorrow 2021 —京都府新鋭選抜展—優秀賞」(京都文化博物館、京都/2021年)、第41回公募キヤノン写真新世紀2018佳作(2018年)。



き はら ゆい か  
**木原 結花**

第6期

2024年1月27日(土)～  
2月25日(日)

## 何者でもない存在を体験

ただ生きているだけでも体力と気力とお金は失われていくのに、そこに創作活動をプラスされると全てがギリギリです。その中で自分に何が作ることができるのか。文化や芸術が人に与えるものは、人それぞれだと思いますが、私自身はそれらに触れている時は現実から逃避することができるため、大変ありがたい存在です。作品を通じて伝えたいこと、感じてほしいことを言葉にするのは難しいですが、作品を目の前にしたとき、自分自身でも、作品の作者でもない、何者でもない存在になるような感覚を覚えるときがあります。大変難しいことなのですが、私の作品でそのような体験をつくるができたらいつとも考えています。

本展覧会に選んでいただき、とても光栄に思います。今までとは違う展示会場ですが、やり遂げることができたと思います。



《行旅死(大阪府平野区長吉川辺3丁目1番新明治橋下空き地)》2017年

### プロフィール

1995年大阪府生まれ。2019年大阪芸術大学大学院芸術研究科博士課程前期修了。主な展覧会歴は、第15回写真「1\_WALL」ファイナリスト展(2016年)、A-Lab Artist Gate 2017(あまらぶアートラボ、兵庫/2017年)、「写真的曖昧」(金沢アートグミ、石川/2018年)、Belfast Photo Festival(北アイルランド/2019年)、あざみ野フォト・アニユアル とどまってみえるもの(横浜市民ギャラリーあざみ野、神奈川/2021年)、DAZZLER(京都芸術センター、京都/2022年)。大阪芸術大学写真学科平成28年度卒業制作展学長賞(2017年)。

## 大阪中之島美術館

大阪市北区中之島4-3-1 TEL. 06-4301-7285(大阪市総合コールセンター)

- 開場時間 10:00-17:00(ただし2024年2月10日から2月25日までは-18:00) 月曜日休館(休日の場合は翌平日)
- アクセス
  - ・京阪中之島線渡辺橋駅(2番出口)より徒歩約5分
  - ・Osaka Metro四つ橋線肥後橋駅(4番出口)より徒歩約10分
  - ・JR大阪環状線福島駅/東西線新福島駅(2番出口)より徒歩約10分
  - ・阪神福島駅より徒歩約10分







株式会社 京都銀行  
代表取締役会長

土井  
伸宏氏

どいのぶひろ

## 歴史と伝統が息づくまちで お客さまと地域社会の繁栄に奉仕

「地域社会の繁栄に奉仕する」を経営理念に掲げ、地元産業の発展や地域の社会的課題の解決に取り組む京都銀行。同行は、広域型地方銀行としての経営基盤を生かし、地域振興につながる事業支援やビジネスマッチング、SDGs推進のコンサルティングなどと業容を広げる一方、芸術を学ぶ学生の支援にも取り組んでいる。それらの思いについて、当協会の崎元利樹理事長が伺った。

### 後発ゆえの営業戦略

**崎元** 地方都市の生活・経済を支えるために、地方銀行の存在はとても重要だと思います。まずは、御行の成り立ちや事業の特徴についてお聞かせください。

**土井** 我々は、昭和16(1941)年に京都府福知山市で創立した丹和銀行が始まりです。昭和26(1951)年に京都銀行と名前を変えました。創立80年余りの比較的歴史の浅い銀行です。

創立当時、京浜工業地帯などの戦後復興が国策として進められており、京都に支店を置く都市銀行や地方銀行が、こぞって多額の資金を融資していました。そのため京都の経済界は、京都の資金が東京へ流れて地元へ還元されない事態を憂慮し、昭和28(1953)年、京都の経済活動を支えるために福知山市にあった我々の本店を京都市内へと呼び込んだのです。

当時、京都の基幹産業は、西陣織や室町織・繊維卸に代表される繊維産業でした。しかし、老舗の呉服屋さんはすでに長年の取引銀行をお持ちで、後発の当行が入り込む余地はありません。そこでベンチャー企業への営業開拓に

注力しました。村田製作所(1950年設立)、ローム(1958年設立)、現在の京セラ(1959年設立)などがそうですし、テレビゲームを開発する前だった任天堂には人材も送って経営を支援しました。これらの中には、京都の伝統産業をベースに新たな技術を創出した企業も少なくありません。我々の先輩はそうした企業への営業開拓に苦勞



聞き手 崎元 利樹

公益財団法人 関西・大阪21世紀協会 理事長



されましたが、後にこれらの企業が世界で名を馳せるほどに成長したのは周知の通りです。その株式を保有する京都銀行の含み益は地方銀行中トップで、それが財務体質の健全性につながっています。

**崎元** 地元の新興企業との連携を柱として、京都の経済発展に尽くしてこられたのですね。

**土井** そうです。とはいえ京都は大阪や滋賀、けいはんな学研都市(関西文化学術研究都市)のある奈良とのつながりが強いですし、神戸ともつながっています。そこで当行は「広域型地方銀行」として、2000年の草津支店出店以来、滋賀、大阪、兵庫、奈良、さらには愛知にも出店し、現在、京都を中心に174か店を擁するにいたりました。

また、京都以外の地で「京都銀行」に親近感を持っていただくイメージ戦略の一つとして、「ながーい、おつきあい。」というフレーズのコミカルなテレビCMを19年ほど流し続けてきました。これが奏功し、営業訪問すれば「あの“ながーい、おつきあい。”の京都銀行さんですね」と親しみを覚えて迎えられるようになりました。

## 変わる銀行業務

**崎元** 日銀の金融緩和(低金利)政策が長らく続いています。御行のビジネスにはどのような影響があらわれますか。

**土井** ここ10年間は地を這うような低金利で貸出金も金利がゼロに近くなり、これだけではやっていけません。近年は銀行に対する企業側のニーズが変化しています。我々には多くの取引先企業がありますから、M&A(合併・買収)や企業間のビジネスマッチングとか、ベンチャー経営のノウハウを教えてほしいとか、最近だとSDGsの進め方を教えてほしいというご要望もあります。そうしたお客さまからの幅広いニーズに応えられるコンサルティング業務を提供しなくてはなりませんし、それによるフィー(手数料)ビジネスが重要になってきています。

## 人が活躍する場を提供

**崎元** 御行ではさまざまなファンドを設立され、地元経済の活性化に活用されています。それにはどのような思いが込められているのでしょうか。

**土井** 京都では世界に誇る数々のベンチャー企業が育ってきましたが、近年、それに続く新たな企業が待望されています。京都銀行グループは、2016年に「京銀未来ファンド」を設立し、医療やIT分野、大学発ベンチャーなど、将来成長が期待できるベンチャー企業や中小企業などへの投資を行っています。また、高齢化や後継者不足の問題を抱える京都の伝統産業の衰退を食い止めるため、「京銀ネクストファンド(京銀Next Stage 2021ファンド投資事業有限責任組合/2021年設立)」を立ち上げました。事業継承が難しい企業を買い取り、雇用維持や人材育成を図って企業価値を高めたのち、その事業を必要とする企業に受け継いでもらうというものです。我々は、こうした業務を通じ、取引先の事業継承課題に取り組んでいます。

**崎元** 地方創生に呼応した取り組みも数多く行っておられますね。

**土井** 例えば他の法人や金融機関などと共同で「まちづくり」「地域づくり」のファンドを立ち上げて、行政とも連携して古民家や空き公共施設等をリノベーションするなどして商業施設や交流施設に再活用し、地域の発展と成長を促して

います。京丹後市では、古民家をリノベーションし、東京の日本刀製造会社(株式会社日本玄承社)の本社を当地へ移転するとともに、刀鍛冶たちやそのご家族にも移住していただきました。また、ファンドから新たな鍛冶場の新築を支援しました。そうして日本刀製造の伝統技術の継承と丹後ちりめんなどの地元伝統工芸などとの連携を通じ、地域の活性化に取り組んでいます。



日本玄承社の鍛冶場  
(京都府京丹後市)



また、当行は民間企業による遊休公有資産の活用を推進しています。その一例が、福知山市との「公民連携促進に関する協定」に基づく取り組みです。福知山市では、2012年度から2020年度までに16校の小学校が閉校しました。そこで当行は行政と連携し、廃校の事業活用を検討されている民間企業の方々に、廃校の活用事例を視察していただくとともに、廃校を活用している企業と新たに進出を検討されている企業をマッチングするためのツアーを実施、まちの活性化に取り組んでいます。



福知山市と「公民連携促進に関する協定」を締結(2020年8月)



廃校マッチングバスツアー(2021年7月/福知山市)



## 祇園祭で感じたこと

**土井** 今年は祇園祭が4年ぶりに例年通りの姿で開催され、私は山鉦に付いて巡行に加わりました。巨大な山鉦を四条河原町の交差点で辻回し(方向転換)するのは大きな見せ場ですが、今年は例年にもましてご苦労されているように感じました。辻回しは笛や太鼓のように普段から練習できませんから、コロナ禍で2年間もやる機会がなかったからなのかもしれません。一旦途絶えた伝統技術を復活させるのは大変なことだということを、このとき実感しました。

私は絹織物と深いかかわりのある西陣で生まれ、織機の音を聞きながら育ちました。ですから伝統産業への強い思いがあります。最近は日常的に着物を着る人はごくわずかになりましたが、需要がないからといって着物産業がなくなっていいわけではありません。一枚の着物ができるまでにはさまざまな工程が必要で、そのうちの一つでも担う人がいなくなれば産業も和装文化も危うくなります。我々が伝統技術の継承に貢献しようとしているのは、そうした文化を守ることでもあります。

**崎元** 文化ということではいいですと、京都市立芸術大学の学生を対象にした支援を行われているということですが、どのような取り組みをされているのですか。

**土井** 2001年に「美術研究支援制度」を設け、以来、毎年継続的に京都市立芸術大学生の作品を購入しています。購入した絵画や陶磁器などは2022年までに174点にのぼり、これらの美術作品は当行の研修施設である「京都銀行 金融大学校 桂川キャンパス」内に展示したり、毎年恒例の新春経済講演会(京都銀行、京都総合経済研究所の共催)の会場(京都市勧業館 みやこめっせ)に展示して、多くの人に見ていただく機会を提供しています。学生たちの美術研究費用を支援することと併せ、京都における芸術の創造・振興に寄与できればと思っています。



京都銀行美術研究支援制度作品展  
(2020年1月・新春経済講演会)

## 東京に本社を移さない

**崎元** 話は変わりますが、京都の企業は独自性を守り抜く気概が強いと聞いたことがあります。京都という土地柄が関係しているのでしょうか。

**土井** そうですね。京都発祥で京都に本社・本店を置く企業が、それを東京に移したという話を聞いたことがありません。その理由の一つに、海外にも市場を持つ京都の企業は、外国で「京都本社」というと名前の通りがいいからというのがあります。「東京本社」というと、ただの会社のように思われてしまう」とおっしゃる経営者もいます。もちろん東京には東京の、大阪には大阪の良さが

ありますが、皆さん京都という名前や都市格に誇りを持っていて、いくら便利でも東京へ本社を移転する意味を感じておられないのです。我々にとっては、企業の本社機能つまり財務部門が京都にあり、経営トップが京都に住んでおられるのはありがたいことです。

## 地方分散を成功させる責任

**崎元** 中央省庁の地方への初めての移転として、今年、文化庁が京都にやってきました。このことについて、どのような思いを持っておられますか。

**土井** 文化庁の京都移転は、東京一極集中を分散させる大きな一歩だと思います。これを機に、地方にあっても不都合なく中央の行政機能が果たせることを示さなくてはなりませんから、「京都に移転して良かった」というてもらえるよう、行政や我々企業にもこれを成功させる責任があると思います。

**崎元** 地方分散のトップランナーとして、京都の方々のご活躍に期待いたします。さて、2025年大阪・関西万博を控えて、関西地域のさらなる発展の期待も高まっています。万博についてはどのような思いを持っておられますか。

**土井** 万博は大阪・関西の存在感をあらためて世界にアピールする絶好の機会です。今回は「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマで、IT技術や脱炭素などSDGsへの取り組みに拍車をかける歴史的な万博になるでしょう。来場者は京都へも足を延ばされるでしょうから、京都の経済界は「万博に来てよかった、京都に来てよかった」と思ってもらえるよう、京都ならではのしっかりしたおもてなしを考えなくてはならないと思います。現在、京都府民・市民には会場への距離感があって万博への参加意識がまだ醸成されていないようですが、万博を契機に近隣の府県への経済効果も期待できますから、オール関西で万博の期待感を醸成していく必要があると思います。

**崎元** 京都そして御行ならではの貴重なお話を伺いました。伝統文化や産業を守りながら、新たな地域振興に取り組まれる御行に期待したいと思います。今日はどうもありがとうございました。

(2023年8月3日／京都銀行本店にて)

### 土井伸宏氏

1956年京都市出身。滋賀大学経済学部卒業、1980年京都銀行入行。取締役人事部長(2007年就任)、常務取締役(2008年就任)、取締役頭取(2015年就任)を経て2023年6月より現職。京都商工会議所副会頭。

### 株式会社京都銀行

本店：京都市下京区烏丸通松原上る薬師前町700番地。1941年創立。資本金421億円、総資産11兆176億円、従業員数3,353人(2023年3月31日現在)、拠点数197か所(海外駐在員事務所4か所含む／2023年3月31日現在)。

(写真提供：京都銀行)



## 成果報告イベントの開催 (2023年3月11日・イオンモールりんくう泉南)

関西・大阪21世紀協会が2021年度より実施している「学校アートプログラム」。本事業は、小学校にアーティストを派遣して授業を行うことで、子どもたちがアーティストと触れ合い、創造性を育み、心豊かな成長を促すとともに、関西・大阪の文化芸術の活性化を図ることを目的としています。1年目の2021年度は、その取り組み成果の報告を作品や動画の展示で行いましたが、2年目の2022年度は、新型コロナウイルス感染症による各種制限が緩和されたことにより、集客イベントとして実施しました。

## 実施自治体の首長も参加

イベントでは、2年間の取り組み内容の紹介、プログラム実施自治体(泉南市、阪南市、岬町)の首長へのインタビューのほか、2022年度実施プログラムの中、代表的な「アフリカの音楽を体験しよう!」を皆さんに体験してもらうため、同プログラムの講師:ンコシ・アフリカによる南アフリカの国や文化の紹介、ジェンベ(アフリカの太鼓)のミニライブ、観覧者による演奏体験を2回実施しました。

1回目は、阪南市の水野謙二市長、岬町の松岡裕二副町長、2回目は泉南市の山本優真市長にお越しいただき、それぞれ学校アートプログラムを実施した感想や継続的に実施する必要性などについて伺いました。



## 《首長のコメント》

「激動の社会の中で大人になっていく子どもにとって、多文化・アートに小学校のときから直接触れ合える貴重な体験であり、子どもの教育において非常に重要」「子どもたちが主体的に楽しそうに参加している姿を見ていると、このプログラムに参加できてよかった」などの感想をいただきました。また、継続的な実施の必要性について、「参加した子どもたちの90%以上が、またやってみたくて回答したことや、子どものさらなる可能性を伸ばしていくこと、学力ではない非認知能力を増やしていく取り組みであることから、継続的に実施していきたい」とお話しいただきました。



## ミニライブやジェンベの体験も

「アフリカの音楽を体験しよう!!」では、特設会場に設置した大型モニターに南アフリカの食べ物、アートなどを映し出しながら紹介。続いて、ンコシ・アフリカのミニライブを実施しました。



ンコシ・アフリカによるミニライブジェンベの心地よいリズムが響き渡ると、建物内のあちこちから人々が集まり、会場は大にぎわい。民族衣装を身につけた二人が叩く、軽快で力強いジェンベに合わせて、ダンサー・メイサさんがパフォーマンスを見せてくれました。観覧者は体を揺らし、手拍子を楽しんでいました。会場が盛り上がったところで、

最後は集まった子どもたちを中心にジェンベの演奏を体験しました。

プログラム実施校で発表を見た他学年の児童も、「私もやってみたかったから」と来場するなど、地域の子もたちが続々と参加してくれました。MCのやのパンさんや市長、副町長も加わり、初めて体験する異国の楽器に「手が痛かったけど、楽しかった」「もっとやりたい」と大満足の様子でした。

1日のイベントでしたが、地域の方々が芸術文化を知り体験するきっかけとなり、芸術文化の裾野を広げる一助となりました。



演奏体験を楽しむ子どもたち

## アーティストプロフィール

### ンコシ・アフリカ (ジョゼフ・ンコシ / 河辺知美)

南アフリカ共和国出身。伝統楽器マリンバをはじめ、さまざまなアフリカンパーカッションの奏者で、楽器制作や絵を描くマルチアーティストであるジョゼフ・ンコシさんと、大阪府出身のジェンベ、マリンバ奏者の河辺知美さんによるアフリカン音楽のユニット。各地でアフリカ音楽の公演を行うほか、ワークショップなど幅広く活動中。

### シェハ・メイサ・ボーイ

西アフリカセネガル共和国出身のサバール(手とスティックを使って演奏するセネガルの伝統楽器)奏者。ダンサーとしても大活躍し、全国各学校や各種イベントに多数出演している。





# 令和4年度 大阪文化祭賞 贈呈式

主催 大阪府 大阪市 公益財団法人 関西・大阪21世紀協会



受賞者（前列）と各部門の審査委員長他（後列）

2022(令和4)年度

## 大阪文化祭賞を贈呈しました

(2023年3月13日／NCB会館)

◆主催：大阪府、大阪市、公益財団法人 関西・大阪21世紀協会

### 花柳 與さん(日舞)ら9公演に賞を贈呈

関西・大阪21世紀協会は、大阪府・大阪市とともに、芸術文化活動の奨励と普及、大阪の文化振興の機運醸成を目的に、大阪府内で1年間に上演された公演の中から、特に優れた成果をあげた公演に対して「大阪文化祭賞」を贈呈しています。

この賞は1963(昭和38)年に創設され、今回で59回目を迎えました。関西の著名な芸術家・文化人・ジャーナリストが審査員を務め、第1部門「伝統芸能・邦舞・邦楽」、第2部門「現代演劇・大衆芸能」、第3部門「洋舞・洋楽」の各分野から、独創性、企画、内容、技法などの総合的に優れた公演が推薦・選考され、最終審査を経て受賞者を決定しています。

今年度の大阪文化祭賞は、花柳與さん、桂あやめさん、奈良ゆみさん、また、将来の期待を込めた同奨励賞は、成田奏さん他個人や団体などに贈られました。

今年90歳の花柳與さんは、賞贈呈理由として“関西歌舞伎界の役者として研鑽を積み、舞踊家として鍛錬を重ね、唯一無二の表現が観る人の心を震わせた”と称えられ、[今からまだ頑張っていきたい]と応え、会場から感嘆と拍手が上がりました。桂あやめさんは、男性中心の落語界にあって上方で二人目の女性落語家として奮闘。女性目線で描いた新作落語や古典の改作で道を切り開いてきた成果が高く評価されました。フランス在住の奈良ゆみさんに対しては、“奈良さんが得意としてきた

サティだけでなく、多彩なフランスの作曲家の作品が並び、作品のキャラクターが十分に尊重された上で、自身の持つシャーマニスティックというべき強烈な個性を発露した歌唱が立ち現れ、相乗効果をもって聴く者に強く迫るという稀有な音楽体験を現出させた”と、歌唱のもつ可能性が高く評価されました。

贈呈式後の受賞記念公演では、奈良ゆみさんによる歌唱『逢ふことの』（松平頼則作曲）と『セクエンツァⅢ』（ルチアーノ・ベリオ作曲）、前田妃奈さん(奨励賞)によるヴァイオリン演奏『序奏とロンド・カプリチオーソ イ短調 作品28』（サン＝サーンス作曲）が披露されました。

関西・大阪21世紀協会は、芸術・文化分野における人材の発掘や育成、交流事業の一環として大阪文化祭賞を重視し、受賞者の記念公演を開催するなどアピールに努めています。また、受賞者の一層の励みとなるよう、副賞賞金(大阪文化祭賞20万円、同奨励賞5万円)を贈呈しています。



奈良ゆみさん(記念公演にて)



前田妃奈さん(記念公演にて)

詳しくは下記ホームページに掲載

●大阪文化祭賞



●公益財団法人  
関西・大阪21世紀協会





## 2022(令和4)年度・各部門の受賞者 「」内は受賞公演名／敬称略

### 第1部門 伝統芸能・邦舞・邦楽

大阪文化祭賞 ▶ 花柳 與<sup>あとう</sup> 「花柳與卒寿記念舞踊会 一扇会」

大阪文化祭奨励賞 ▶ 成田 奏<sup>そう</sup> 「調和会 和のしらべ 特別公演『道成寺』」 吉田 玉翔<sup>たましょう</sup> 「文楽若手会 絵本太功記」

### 第2部門 現代演劇・大衆芸能

大阪文化祭賞 ▶ 桂 あやめ 「40周年あやめの会」

大阪文化祭奨励賞 ▶ 桂 吉坊<sup>きちぼう</sup> 「吉坊ノ会」 劇団壱劇屋<sup>いちげきや</sup> 「Supermarket!!!」

### 第3部門 洋舞・洋楽

大阪文化祭賞 ▶ 奈良 ゆみ 「祝祭の夜 サティとフランス六人組」

大阪文化祭奨励賞 ▶ 日本バレエ協会関西支部 「第48回バレエ芸術劇場『パキータ』『フェアリードール』」  
前田 妃奈<sup>ひな</sup> 「関西フィルハーモニー管弦楽団 第333回定期演奏会」

## 大阪文化祭賞 受賞者コメント



### ◆ 花柳 與さん (日本舞踊家)

大阪文化祭賞をいただきまして、本当に喜んでおります。まだ今年90歳になったところですが、この道に入ってから85歳です。今からまだ頑張っていきたいと思いますので、どうぞ皆さん応援してください。



### ◆ 桂 あやめさん (落語家)

毎日のようにたくさんの公演がある中で見つけていただいて、本当にありがたいです。もっと人に驚いて笑ってもらえるような演出を考えていかないといけないと思います。発展途上である私に、このような賞をくださりまして、本当に感謝しております。



### ◆ 奈良 ゆみさん (ソプラノ歌手)

本当を申しますと、驚いています。(フランスでの) コンサートも重なっており、(日本に) 帰らないでいるかと思っていましたが、贈呈理由を見た途端、感動して「帰ろう」と決めました。ありがとうございます。

## 大阪文化祭奨励賞 受賞者コメント



### ◆ 成田 奏さん (能楽師小鼓方)

師匠並びと一緒に舞台をつくっていた先生方、先輩方、また、家族に支えられられない(道成寺の)初演になりました。



### ◆ 桂 吉坊さん (落語家)

師匠や先人の芸や思いを、僕らが次につなげるという責任をもって、一生をかけてやらせていただきたいと思います。



### ◆ 日本バレエ協会関西支部 (支部長・櫻野 隆幸さん)

いい作品をずっと続けられたことに感謝しております。先生方の残してくださったものを受け継ぎ、新たな時代に向けて頑張っていきたいと思っています。



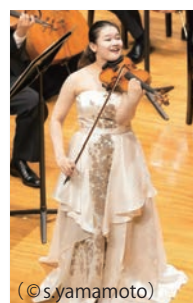
### ◆ 吉田 玉翔さん (文楽座人形遣い)

これからも芸道精進しまして、新たなことにも挑戦していきたいと思っています。文楽はもちろんのこと、大阪の文化の発展に貢献したいと思います。



### ◆ 劇団壱劇屋 (代表・大熊 隆太郎さん)

受賞作品は、関西を代表する人気作家の皆様をはじめとする関西の小劇場演劇の力の結集によるもので、本当にうれし限りです。



### ◆ 前田 妃奈さん (ヴァイオリニスト)

コンチェルトは一人で弾くものではなく、指揮者や関西フィルハーモニー管弦楽団の皆様のおかげでこそ。とても感謝しています。



# ナニワの地から世界を視野に 新たなムーブメントを



左から中田一葉さん、山本寿弥さん、成田奏さん、貞光智宣さん

## 能楽囃子ユニット「ナニワノヲト」

2019年11月、20代の若手能楽師4人が、幅広い世代に能楽囃子の面白さを伝え、600年の伝統を未来につなげるべく、能楽囃子ユニット「ナニワノヲト」を結成しました。その直後からコロナ禍の苦境を乗り越えてきたメンバーたちは、ニューノーマル時代を迎えた今、演奏会やワークショップ、インターネット配信など、新たな勢いで活動しています。代々続く能楽師の家に生まれ、いつかは4人で海外公演をしたいと口を揃える皆さんに、能楽にかける思いなどをお話いただきました。

### ●人間ではない者を表現

なかた かずは  
**中田 一葉さん**

〈太鼓方金春流〉

太鼓は、神様や鬼、妖怪、幽霊などが登場する場面で、その足音や鼓動を表現するものとして使われることが多くあります。昔の人は、二つの撥を使って打つ太鼓の音に人間ではない雰囲気を感じていたんですね。また、太鼓は鼓に比べて音も2倍出せるわけですから、曲のクライマックスを一層盛り上げ、段々と終わりへと持っていく役割があります。そうして演奏が終わって客席を向いたとき、お客さまの満足された表情を見てとても充実感を感じます。

私は、3歳から父のもとで太鼓の稽古を始めました。舞台に出るのは当たり前だと思って育ちましたし、そのために厳しい指導を受けるのも当然のことと受け入れていました。小学生の頃、学校に謡本<sup>うたいほん</sup>を持って行って、休み時間におさらいをしていたほどです。

コロナ禍で公演中止が続いていたとき、祖父の会社で事務の仕事を手伝っていました。初めて能楽以外の仕事を経験し、ふと“こういうのもいいな”と思いました。やはり舞台での演奏が好きですし、能楽の世界でしか経験できないこともありますので、あらためてこれからも続けていきたいと思いました。現在、能楽界で太鼓方は非常に少なく、私が最年少です。だから私が次代の太鼓方を担わなければならないという責任も感じています。

最近では海外公演も再開され、今年6月にポーランドで公演を行いました。このチケットはすぐに完売したそうです。外国の人は日本の伝統芸能に大きな関心を持っていて、日本文化は世界に誇れるものだということをあらためて実感しました。

※謡本…能の台本に謡曲の譜を付けたもの

1996年大阪府大阪市出身。人間国宝三島元太郎および父中田弘美に師事。大阪能楽養成会卒業(2010年入会)、公益社団法人能楽協会会員(2018年入会)。趣味は写真で「夕陽丘うえまち写真コンテスト(2020年)」入賞(七坂賞)の腕前。

### ●一瞬の静寂に感じる美

やまもと としや  
**山本 寿弥さん**

〈大鼓方大倉流〉

甲高く鋭い音色が出る大鼓は、4人の中で最もインパクトが強く、掛け声も強いので男性的な楽器といわれます。音色は強弱の二つだけですが、その限られた音色を使い分けて最大限に表現しているところを聴いていただければと思います。ナニワノヲトの公演のトークコーナーでは、そんな楽器の特徴や曲目、能の場面などを分かりやすく解説し、能楽に馴染みのない方にも興味をもっていただけるよう努めています。それは同時に、私たちのトークスキルの鍛錬にもつながっています。

演奏中は、自分の演奏に加えて他の奏者の音や掛け声に対応することで頭がいっぱいで、楽しむ間もなく気づいたら終わっているという状態です。ただ、舞台上で何の音も発しない瞬間があり、その張り詰めた静寂をとて美しく感じ、そんな素晴らしい舞台に携わっていることを嬉しく思うことがあります。

私は代々続く大鼓方の家の4代目です。父は私が能楽師になることを強制しませんでした。継いでほしいという気持ちはひしひしと感じていました。私は英語の教師になるつもりで大学に進学しましたが、小学校や中学、高校などで能楽や楽器のことを教える機会があって考えが変わりました。人に教えながら伝統文化を守り継承していく仕事は、教師と能楽師の両方をしているのと同じだと思ったからです。

コロナ禍で1年以上公演が中止されましたが、この間、父から課題を出され、いつも稽古をしていました。公演日という目標がなかったので辛かったのですが、これで父との会話を深めることができたし、父の能楽師としての凄さを知る機会にもなりました。

1994年大阪府豊中市出身。祖父山本孝および父山本哲也に師事。大阪能楽養成会卒業(2010年入会)、公益社団法人能楽協会会員(2018年入会)。趣味は漫画、ゲーム、ラーメンの食べ歩き。漫画の話題作はほとんど読んでいます。





※能楽囃子…太鼓方、大鼓方、小鼓方、笛方の4人で構成された能楽の楽隊。4つの楽器によって、物語の情景や登場人物の感情を力強く表現する。能の伴奏だけではなく、能楽囃子だけによるコンサートも行われる。囃子は向かって左から順に楽器の大きなものから並ぶことが決まっている。

## ●能楽ならではの高揚感

なりた そう  
成田 奏さん

〈小鼓方幸流〉

現在、30代以下の囃子方は20人程度しかいませんが、ちょうどいい感じで年齢の近い囃子方が関西に4人いたので、私からユニットの結成を呼びかけました。私たちの父親世代が20～30代に「響」というユニットで活動しており、自分たちもチャレンジしたいと思ったからです。

小鼓の演奏では、左手で紐を握ったり緩めたりして皮の張り具合を調節し、さまざまな音色を使い分けています。また、掛け声を出すタイミングは1小節の中で2拍目は大鼓、4拍目は小鼓というように曲ごとに決まっています。私がリーダーシップを執って演奏を引き締めようとするときは、誰よりも強い掛け声を出して意思表示をします。こうして互いに引っ張り合って演奏に高揚感を生み出すのは、歌舞伎や日本舞踊とは異なる能楽ならではの特徴です。

私は小学生の頃から、歌手やスポーツ選手のように自分の才能や技術を磨いてそれを職業にすることに憧れていました。小鼓に触れてはいましたが、能楽に関心はなく、中学生になると離れていきました。しかし、高校卒業前に父の後見で舞台に出ていたとき、囃子方が汗だくになって『班女<sup>はんめ</sup>』を奏でているのを間近に見て、衝撃を受けました。謡の意味は分かりませんでしたが、演奏によってシテ(主役)の感情の起伏がはっきり見えなりました。どうすればそんな表現ができるのか、囃子方を汗だくになるまで必死にさせるものは何なのかが気になり、真剣にやってみようと思いました。コロナ禍で舞台に出ていない間は、能の歴史や曲目について勉強し直し、もっと能に近づきたいという気持ちが高まりました。

※班女…遊女の哀切な恋心を描いた世阿弥の名作



## ●引っ張り合いを楽しむ

さだみつ ともりの  
貞光 智宣さん

〈笛方森田流〉

笛は囃子方の中で唯一の旋律楽器で、打楽器の3人が作るリズムに乗ってメロディーを奏でます。腹の底から響く地鳴りのような音から、空間を切り裂くような高音まで音色は幅広く、能のさまざまな曲を一管で表現します。

能は、一度きりのリハーサル以外の全体稽古をしません。一期一会の良さを大事にして、何度も同じことをしないと決めているからです。だからイメージと違うまま終わることもあれば、他の囃子方に引き立ててもらい、思った以上に満足な演奏ができることがあります。私たちはこれを“引っ張ってもらおう”といっていますが、私の方から引っ張ってやろうと思うときもあり、そうしたお互いの気持ちを感じる瞬間が面白いのです。

私は4代続く笛方の家に生まれ、10歳頃から1回30分ほどの稽古を月3回ほど、ゆるい感じで続けました。父は、“他の職業を選んででもかまわない”といってくれていましたが、大学で就活時期を迎えると、笛が自分のアイデンティティーの一部になっていることに気づき、それを捨てて能以外の仕事に就こうとは考えられませんでした。私たちには定年がありませんので、60歳になっても80歳の先生から教えられることがあります。これはとても大事なことで、円熟の歳になってもまだ芸を向上させることができるんです。生涯勉強といわれるゆえんです。

コロナ禍がきっかけで、インターネットでの動画配信が増えました。能楽師はライブ感を大事にしますが、能に誘う間口を広げる意味で、やってよかったと思っています。海外発信や外国人向けのワークショップなども大事な仕事で、目下、英会話の上達が課題です。



1996年兵庫県神戸市出身。曾和博朗、曾和正博および父成田達志に師事。大阪能楽養成会卒業(2013年入会)、公益社団法人能楽協会会員(2019年入会)。令和4年度大阪文化祭奨励賞受賞。趣味は料理作りで、最近では自作の中華料理でビールを楽しむ。

1992年奈良県生駒郡出身。祖父貞光義明に師事。大阪能楽養成会卒業(2012年入会)、公益社団法人能楽協会会員(2018年入会)。海外YouTubeの番組を英語字幕で見て英会話を勉強中。今年7月に待望の娘が誕生し、Instagramに子育ての様子をアップ。



# 日本万国博覧会記念基金事業



世界各国で助成が生かされています。

過去50年間に日本万国博覧会記念基金の助成を活用して建設された海外の施設についてご紹介します。

## <第5回>

## アユタヤ日本村(タイ)



アユタヤ日本村は、バンコクの北にあるアユタヤのチャオプラヤー川東南側のアユタヤ王朝時代に日本人町が存在した約12,000㎡の敷地に、資料館や庭園などを整備し、当時の日本人町を紹介する施設です。万博記念基金では、1977年度にアユタヤ旧日本人町遺跡の整備に助成をしています。アユタヤ日本村の管理をしている泰日協会(Thai-Japanese Association)マネージャーのパクワディー・ソンプシリ(Pakwadee Sombutsiri)さんに、アユタヤ日本村についてご紹介いただきました。

| 助成年度   | 助成事業名          | 助成事業者 | 金額         |
|--------|----------------|-------|------------|
| 1977年度 | アユタヤ旧日本人町遺跡の整備 | 泰日協会  | 7,999,999円 |



アユタヤ王朝は、バンコクの北80kmに位置し、1351年から400年程栄えた都で、チャオプラヤー川とその支流に囲まれた地形を生かした水運

交易で発展し、ヨーロッパと東アジアを結ぶ国際貿易都市として繁栄しました。オランダ、ポルトガル、中国、日本などの外国船が多数往来し、その拠点として多くの外国人町が形成され、日本人町もチャオプラヤー川東南側に作られ、時代により800人から3,000人程度の日本人が居たと伝えられています。



鳥居と神社

泰日協会は、アユタヤ時代のオランダ東インド会社資料により、アユタヤにあった旧日本人町跡地の位置を確認すると、旧日本人町の遺跡保全のために約12,000㎡の土地を取得して、アユタヤ日本村を整備しました。



「日本人町の碑」の碑

その後、タイと日本の修好100周年の1987年に、アユタヤ歴史研究センターの別館をアユタヤ日本村に建設、修好120周年の2007年には

別館内部を大幅に改装するとともに、村内に日本庭園と休憩所を設置しました。また、タイ日修好130周年の記念として、2018年にはVRストリートミュージアム技術によるアユタヤ王朝時代の日本人町の再現など、村内施設を充実させてきました。



日本庭園と休憩所

アユタヤ日本村は、ピーク時には月平均8,000人程度の来場がありました。最近では新型コロナウイルスの影響により来場者は減少しましたが、規制解除後には月6,000人程度まで回復しています。

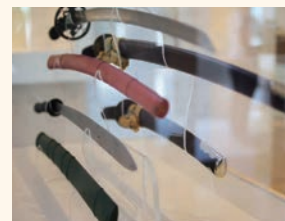
4月のお花見、7月の七夕まつり、11月のロイクラトンナイトなど、日本やタイの文化を紹介するイベントも開催しておりますので、タイにお越しの際はアユタヤ日本村にお越しください。



お花見フェスティバル2023開会式



ビデオルーム



刀の展示

写真提供 泰日協会(Thai-Japanese Association)

# 2023年度助成金および奨学金贈呈式&事例発表会

2023年7月27日／大阪工業大学梅田キャンパス常翔ホール

## 国内外31団体に総額7,420万円を助成

関西・大阪21世紀協会は、2023年度の万博記念基金助成事業として、国内外から申請された145件の中から31件を採択し、総額7,420万円の助成を決定しました。また、日本文化を研究する外国人留学生（大学院修士課程）を対象とした奨学金給付事業については、京都市立芸術大学、大阪大学、早稲田大学からそれぞれ推薦された5名に奨学金の給付を決定しました。

7月27日にその贈呈式が行われ、出席した国内13団体の中から、代表として3団体と留学生5名に崎元利樹理事長から目録が手渡されました。崎元理事長は冒頭の挨拶で、「コロナ禍も落ち着き、今後さまざまな取り組みが出てくることから、これまで以上に多くの方々に申請していただきたい。助成金・奨学金を受けられた方々には、これを有効にご活用いただいて大きな成果を上げられ、留学生の方々には、将来、日本と母国の架け橋としてのご活躍にも期待している」と述べました。

贈呈式の後、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（2022年度助成）

と一般社団法人東京国際合唱機構（2023年度助成）の活動が紹介され、休憩をはさんで2024年度助成事業の募集説明会が開催されました。なお、募集説明会は福岡（8月18日）、東京（9月1日）でも実施されました。



### 2023年度の申請と採択の内訳

|           | 申請    |                | 採 択  |           |
|-----------|-------|----------------|------|-----------|
| 国内外合計     | 145件  | 4億2,949万1,000円 | 31件  | 7,420万円   |
| 国外事業者（内数） | (27件) | (1億292万5,000円) | (8件) | (2,170万円) |

※申請件数145件および採択件数31件には、それぞれ2022年度の数年度助成助成事業（継続）1件を含みます。

### 助成団体の活動紹介

#### 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会

〈絵本と紙芝居を通じたアジアの多民族文化継承による社会的に弱い立場に置かれた子どもたちへの支援事業／2022年度助成〉

事業サポート課 海外事業担当 竹本 舞さん



当会は1981年に日本で設立され、日本、ネパール、ラオス、タイなどアジア7か国8地域で、民族の多様性を尊重する活動や教育文化支援を行っています。近年、これらの国々では近代化やグローバル化により生活様式の画一化が進み、多様な民族が民話や口承によって伝えてきた文化や伝統が途絶えつつあります。例えばネパールでは、親が外国へ出稼ぎに出たり、親と一緒に外国で暮らしたりする子どもが多いため、民族の伝統や文化の継承が困難で、特に外国で暮らす子どもは自分のルーツを絶たれ、言葉や文化の壁もあってアイデンティティを確立しにくく、自尊心の低下を招くこともあります。

本事業は、ネパールの子子どもたちが祖父母などから地域に伝わる民話を聞いて絵本を作る「昔ばなし絵本出版活動」です。現地の図書館3館で25回実施し、694人が参加。子どもたちに自分たちの歴史や文化を学ぶ機会を提供するとともに、地域の世代を越えたつながりにも貢献しました。絵本は3種で各1,000部ずつ印刷し、ネパール国内の図書館169館に配布しました。



#### 一般社団法人東京国際合唱機構

〈東京国際合唱コンクール事業／2023年度助成〉

実行委員会 杉村 信さん



本機構は、人と人が集い、国籍、人種、年齢を超えて対等な立場で作る芸術である「合唱」を通じ、その振興や国際文化交流、青少年育成などの社会貢献事業を行っています。その一つである東京国際合唱コンクールは、演奏を競うだけではなく、互いを認め合い、讃え合って友情を育む場にする事を理念にしています。2018年の第1回から東京都中央区と共催し、第5回となる今年は、7月29日～30日の2日間、公民館や商業施設などで国内44団体・941名、海外21団体・630名の合計65団体・1,571名が参加します。

本コンクールは部門の幅広さが特徴で、児童合唱、シニア、学校合唱部、ユース、同声合唱、混声合唱など10部門があります。特にフォルクローア（民族音楽）部門は、歌だけではなく、衣裳や踊りなど視覚的要素も一体となった舞台芸術です。また、コロナ禍をきっかけに生まれた映像作品部門は、オンラインを通じて発信され、視覚的な演出を重視した合唱作品です。課題曲は日本を代表する合唱作曲家の書き下ろしの新曲で、海外の合唱団に日本の文化や価値観を知ってもらう機会にもなっています。





# 日本文化を研究する外国人留学生への奨学金給付事業

## 2023年度奨学生決定

万博記念基金では、「日本文化を研究する外国人留学生を対象とした奨学金給付事業」の2023年度奨学生として、5名の奨学生を決定しました。今後、日本の伝統文化を学ぶ機会や交流の場を設け、奨学生同士や当協会とのつながりを深めて、将来「日本と外国の架け橋」となる人材を育成していきます。

### 2023年度奨学生の声



**鄭 卉芹** (ジュン ホウイチン) さん<台湾>  
京都市立芸術大学  
大学院美術研究科  
保存修復専攻

文化財保存修復の技術者を目指しています。日本の絵画修復技術を学び、それを世界に広め、貴重な文化財を後世に伝えていきたいと思っています。



**吳 雯雯** (ゴ ブンブン) さん<中国>  
京都市立芸術大学  
大学院美術研究科  
工芸専攻 (漆工)

日本の伝統工芸漆と現代技術を融合し、漆の可能性を広げる研究をしています。この技術を中国でも活用し、中日両国の架け橋になりたいと思っています。



**肖 藝凡** (ショウ ゲイボン) さん<中国>  
大阪大学大学院  
人文学研究科  
人文学専攻 (哲学)

パフォーマンス理論と哲学を結びつけ、日本映画・演劇作品の再評価と創作のための理論構築によって、文化間の対話を活性化させる成果を上げたいです。



**河 璘** (ハ リン) さん<韓国>  
大阪大学大学院  
人文学研究科  
芸術学専攻 (美学)

日本の食文化から見る持続可能なガストロノミーについて研究しています。この成果を生かし、将来は、日本の食文化の継承や発展に取り組みたいです。



**MANETTI, Anna** (マネッティ アンナ) さん<イギリス>  
早稲田大学大学院  
文学研究科  
人文科学専攻 (国際日本学)

日本語が分からない人でも日本の翻訳技術を学ぶことができる研究をしています。この機会を得て研究を完成させることができ感謝しています。

## 助成先の事業紹介 2023年度助成事業の中から、事業者より寄せられた内容をご紹介します。

### 火の鳥プロジェクト (日本、ポーランド、マレーシア、ブラジルの4か国による国際共同舞台芸術創作事業)

**事業者:** 特定非営利活動法人ブリッジフォーージ  
アーツアンドエデュケーション  
**助成金額:** 500万円 (2023年度)  
(3年総額: 2000万円)  
**実施期間:** 2023年4月1日~2026年3月31日  
2023年度 公演日 2023年10月26日~29日  
**実施場所:** マレーシア (2023年)、  
ブラジル (2024年)、日本 (2025年)

日本、ポーランド、マレーシア、ブラジルを代表する文化芸術団体が提携し、2022年から2025年まで、各国で舞台芸術作品の国際共同制作「火の鳥プロジェクト」を実施します。「火の鳥プロジェクト」は2022年度に第1章のポーランド公演を実施済みで、2023年から2025年に舞台芸術作品の公演を行う第2章から第4章を助成対象としています。

2023年度は、小池博史演出の舞台「SOUL of ODYSSEY」(原作「オデュッセイア」)をマレーシアの共同制作パートナーと創作、公演します。「オデュッセイア」に登場する英雄と怪物を日本とマレーシアが直面している地政学的な課題と照らし合わせ、正義の意味を問い、グローバリズムと資本主義の影響を多角的に表現していきます。2024年度はブラジル・サンパウロで、2025年度は日本・東京および関西で舞台芸術作品の公演を実施します。



マレーシアでのオーディションワークショップ



ポーランド公演の様子



## 1873年ウィーン万国博覧会150周年記念事業 ～日本とヨーロッパをつなぐ～

事業者：KHM博物館連盟ウィーン世界博物館  
 助成金額：500万円（2023年度）  
 （2年総額：940万円）  
 実施期間：2022年4月1日～2024年3月31日  
 実施場所：オーストリア ウィーン世界博物館  
 日本ギャラリー 他

本事業は、2022年度からの複数年度助成事業（2年）で、2023年度は最終年度となります。1873年ウィーン万博の日本出展を振り返り、その意義と役割を検証するため、ウィーン万博の日本展示（美術品、工芸品等）に関するデータベースを作成するとともに、ドキュメンタリーアニメ形式の映画を制作して、明治初期の日本が一国家として



展示品調査の様子

ウィーン万博に参加した1873年前後の主な出来事を紹介していきます。

### 〈1年目の進捗状況〉

ウィーン万博の日本展示品について調査し、ドイツ、ベルギー、ロシア、トルコなどヨーロッパ各地で多くの展示物が確認され、データベースに登録しており、その数はさらに増える見込みです。また、ドキュメンタリーアニメの制作を開始し、脚本が完成、現在アニメーション制作中です。

### 〈2年目の計画〉

ウィーン万博の展示物を所蔵する博物館および美術館の学芸員を招き、公開シンポジウムを開催します。また、



アニメーション・  
キャラクターデザインラフ画



展示品調査の様子

ウィーン世界博物館日本ギャラリーにおいて、現在制作中のドキュメンタリーアニメ映画を常設上映。ウィーン万博150周年記念イベントを日本大使館で実施します。

## メリカルヴィア高校・佐野高校国際交流事業2023

事業者：メリカルヴィア高校（フィンランド）  
 助成金額：300万円  
 実施期間：2023年5月24日～6月2日  
 実施場所：大阪府立佐野高等学校

本事業は、フィンランドと日本の高校生の生活を調査・比較し、両国の理解を深めていくことを目的として、メリカルヴィア高校と佐野高校が二校間で実施する教育活動です。2023年5月末にメリカルヴィア高校の生徒（10名）が10日間の日程で佐野高校などを訪問し、書道を教わるなど交流を行いました。また、8月中旬には、佐野高校の生徒がメリカルヴィア高校を同じく約10日間の日程で訪問する交換留学を行います。



書道の授業の様子



書道の授業の様子



コロナ禍後の「ニューノーマル」といわれる時代。アーティストたちはアーツサポート関西(ASK)の支援を受けて、さまざまな活動に果敢に取り組みはじめています。

## ASKが支援する活動のご紹介

### クラウドファンディング▶伝統芸能

#### 100年以上にわたり非公開であった「杉江能楽堂」を体験するプロジェクト

建立から100年以上にわたり非公開であった岸和田市にある杉江能楽堂。邸宅の一部としてしつらえられた国内でも数少ない半屋外の構造を持つ能楽堂で、昨年、国の登録有形文化財に登録されました。2月19日～26日にかけて、この能楽堂の魅力や歴史を多くの方に知ってもらい、次の100年に向けて継承していこうと、「杉江能楽堂体験プロジェクト」が行われました。能楽師の林本大さんによる「能楽のナナフシギ」、上方舞の山村友五郎さんと落語家・桂吉坊さんによる「杉江能楽堂で上方芸能を楽しむ～上方舞×上方落語の共演」、裏千家・松井宗豊さんによる「杉江能楽堂で『お茶』を楽しむワーク

ショップ」、能楽師和泉流狂言方・小笠原由詞さんらによる「すぎえ狂言会『盆山・蝸牛』」の4つのプログラムが実施され、多くの方々が参加しました。この活動に対してASKのクラウドファンディングで寄付が集められ、集まった寄付から142万円が助成金として交付されました。



『能楽のナナフシギ』会場風景  
能楽師・林本大 場所：杉江能楽堂

### 未来アート寄金助成▶コンテンポラリーダンス

#### コンテンポラリーダンス・プロジェクト「移動する暮らし」

コンテンポラリーダンサーの内田結花さんが中根千枝さんとデュオで取り組むダンス作品「移動する暮らし」が、せんだいメディアテーク(仙台市)と神戸市長田区の漁港周辺を舞台にそれぞれ昨年6月と今年の2月に上演されました。「移動する暮らし」は、二人が数年かけて取り組んでいる作品で、劇場を飛び出して商店街など人々の生活の場に介入しながら演じられるもの。二人が踊るダンスは周囲の環境に作用し、また環境から影響を受けながら、移動し流転する「身体」のあり方や、場所に根差した「暮らす」ことの意味を浮かび上がらせていきます。2月に行われた神戸の公演では、

劇場から始まったダンスが、中断をはさんで場所を漁港に移して続き、最後は、観客の一人ひとりが劇場で渡された小石を海に向かって解き放ち、観客自身も作品の一部となって、意識の解放を体験しました。



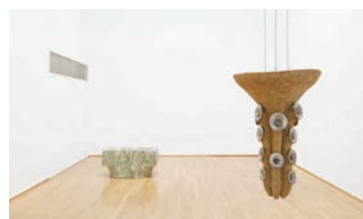
『移動する暮らし』パフォーマンス風景  
内田結花・中根千枝 場所：神戸市長田港付近 撮影：阪下混成

### 一般公募助成▶美術

#### 西條茜さんが個展「Phantom Body」を開催しました

既存の陶芸の概念にとらわれず、作品に関わる場所の歴史や社会的な文脈、あるいは陶芸の内部と外部の関係性などを斬新な切り口で表現し、大きな注目を集めるアーティストの西條茜さん。昨年、大阪のアートコートギャラリーで、「身体性」をテーマに個展「Phantom

Body」を開催しました。この展覧会にむけて滋賀県立陶芸の森に滞在して数点の大型作品を制作。アーツサポート関西はその制作費の一部を助成しました。展覧会では数名のダンサーが作品を抱擁したり、口づけをしたりするなどのパフォーマンスを行い、身体との対比によって、通常の陶器の用途を超えた重量感のある存在物として作品が際立って感じられました。こうした活動が高く評価され、西條さんは、丸亀市立猪熊弦一郎現代美術館が昨年新たに設けた、優れた現代美術アーティストに贈られる第1回MIMOCA EYE大賞を受賞しました。



『Phantom Body』展覧会風景  
場所：アートコートギャラリー  
撮影：来田猛

### 一般公募助成▶美術

#### 金サジさんによる写真集「物語」が出版されました

アーティストの金サジさんは、自身も在日韓国人であり、分断され矛盾をはらんだ自分のアイデンティティーの問題をはじめ、男女の性差、西洋美術史に向き合う現代美術の眼差しなど、複雑に錯綜し絡み合うさまざまな現代の様相を、「物語」という視点で浮き彫りにする写真作品を手がけています。作品は映画のロケさながらに、キャストやロケ地、舞台美術、衣装、メイク、照明に至るまで入念に時間をかけて作り込まれており、昨年、2018年から手掛けてきた一連の作品を、写真集「物語」として写真専門の出版会社赤々舎より出版され話題となりました。アーツサポート関西は、2018年

～2019年、2021年～2022年にかけて金さんを支援し、写真集の制作にも大きく貢献しています。アイデンティティーの揺らぎや葛藤、世界を根底から覆すような疫病や戦争に際し、私たちはどのように生きていくのか。金サジさんの作品は、そうした問いを私たちに投げかけるものであるように思います。



写真集『物語』より「永遠に歩く人々」(赤々舎 2022年)

一般公募助成 ▶ 音楽

## 現代音楽家集団ロゼッタの公演「エンカウンター」が開催されました

クラシックギター奏者であり、また現代音楽の作曲家でもある橋爪皓佐さんが主宰する現代音楽家集団ロゼッタ。ロゼッタでは毎年、特定のテーマの下で優れた現代音楽作品を募集する国際作曲公募を行っています。昨年は、コロナ禍の経験から演奏者が揃わなくとも成立する「分割可能性」というテーマで公募を実施。海外を中心に38作品の応募がありました。ロゼッタは、その中から5作品を選び、今年3月25日、ロームシアター京都で開催されたコンサート「エンカウンター」で演奏しました。演奏会では、曲と曲の合間にラジオ番組調の軽いノリによる曲解説を行う演出を施し、難解といわれる現代音楽を聴くことのハードルを下げる工夫なども行いました。そうした試みが奏功し、演奏された現代音楽作

品は、日常と非日常の双方の世界を適度な緊張感で繋ぐような、新たな関係性を生み出しているように感じました。



『エンカウンター』公演より 場所：ロームシアター京都

## 第9回 上方落語若手噺家グランプリ2023決勝戦 (2023年6月20日／天満天神繁昌亭)

アーツサポート関西「寺田千代乃上方落語若手噺家支援寄金」助成

◆主催：公益財団法人 上方落語協会

### 桂そうばさんがグランプリを獲得

上方落語の若手噺家の登竜門として知られる「上方落語若手噺家グランプリ」。アート引越センター現名誉会長の寺田千代乃氏が2015年に設けたファンドをもとにスタートし、今年で第9回を迎えました。グランプリには入門4年～18年目までの若手噺家36名が参加。6月20日に行われた決勝戦には、予選を勝ち抜いた9名が出場し、各自珠玉の持ちネタを披露して会場を大いに沸かせました。熱戦の結果、見事グランプリには、やっかいな酔っ払いが飲み屋の主人にからむ「上爛屋」を演じた桂そうばさんが輝き、準グランプリは芝居ものを得意とする桂染吉さんが「権助芝居」で受賞。参加資格の最後の年での受賞となったそうばさんは「関西は賞が少なく東京の同世代に受賞歴で負けていましたが、これで挽回できました」とグランプリ受賞の喜びを語っていました。



左から上方落語協会会長・笑福亭仁智さん、グランプリ受賞の桂そうばさん、準グランプリ受賞の桂染吉さん、アート引越センター名誉会長の寺田千代乃氏  
2023年6月20日・授賞式にて 場所：天満天神繁昌亭



## 若いクラシック音楽家を支援する助成制度 「トヨタモビリティ新大阪ASK支援寄金助成」が始まります！

アーツサポート関西に、この度、関西で活動する若手クラシック音楽家の支援を目的とした新しい助成制度「トヨタモビリティ新大阪ASK支援寄金助成」が誕生し、この7月から今年度後半に行われる音楽活動を対象にした助成金の申請の受付を行いました。

この新しい助成金は、音楽大学を優秀な成績で卒業したものの演奏の機会に恵まれない若い音楽家たちを応援しようと、トヨタモビリティ新大阪株式会社からいただいた寄付を原資に設けられたものです。

トヨタモビリティ新大阪株式会社は、明治時代より100年にわたり、大阪南部の和泉市で紡績業を営んでいた久保惣を源流とする会社で、久保惣は大阪府和泉市に寄贈された国宝や重要文化財を含む「久保惣コレクション」でも広く知られています。現在、そのコレクションは和泉市立久保惣美術館に収められ、訪れた多くの人々に親しまれています。

この度新たに誕生した「トヨタモビリティ新大阪ASK支援寄金助成」には、《プログラム1》「自主企画によるアウトリーチ・コンサート支援」と《プログラム2》「室内楽のマスタークラス等を行う活動支援」の2つのプログラムがあります。《プログラム1》は、地域のコミュニティやクラシック音楽に触れる機会の少ない方々に音楽を届けるなどのアウトリーチ活動を支援するもので、そうした活動が音楽家たちの学びにつながればという期待も込められています。また《プログラム2》は、音大などで学ぶ機会が減ったといわれる室内楽の重要性に光を当てようとするもので、それにより関西のクラシック音楽界の水準の向上を目指します。

今後、さらにこの取り組みの幅を広げて行くことを予定しており、現在、新しいスキームの導入に向けた準備を進めています。



## 村瀬先生の「ぶらり歴史歩き」

### 大阪城編

「なにわの地理博士」とこと大手予備校・東進ハイスクールの人気講師・村瀬哲史さんの案内で、大阪のまちの歴史や地理をご紹介しますYouTube番組です。現在、当協会のホームページで大阪市内の各所を公開中。「大阪城編(前編・後編)」では、大阪城にまつわる歴史を深掘りするとともに、さまざまな伝説や謎にも迫ります。その一部をご紹介します。



村瀬哲史さん

### 天守閣の屋根は、なぜ緑色？

現在の天守閣は、1931(昭和6)年に大阪市民の寄付で再建されたもの。その屋根は銅の板で葺かれており、長い年月を経て緑青という緑色のサビに覆われました。再建当時の絵葉書には、緑青が生じる前の屋根が描かれています。ちなみに緑青が生じることで銅がコーティングされ、長持ちするそうです。

再建当時(1931年)の大阪城天守閣(大阪市立図書館デジタルアーカイブ「城内貯水池より天守閣を望む」より)



### 大手門にある長年の謎とは？

「大手」は、城の正面や正門という意味。現在の大手門は1628(寛永5)年に徳川幕府により創建され、戦時中の空襲からも奇跡的に免れました。その大手門を支える柱をどうやって継いだのかは、1980年代にX線で解明されるまで長らく謎のまま。「婆娑羅継ぎ」と呼ばれ、釘やボルトのない時代の技術の高さが証明されました。



大手門



### 豊臣時代の石垣を間近で見学

大阪城を眼前に望む追手門学院小学校に、豊臣時代に築かれた石垣(野面積み)の遺構が位置も形も創建時のまま残されています。当時、ここには豊臣秀頼の妻・千姫の執事の屋敷があり、ここで、徳川家康から秀頼へ婚禮祝いに贈られた象を飼っていたのではないかともしわれています。小学校沿いの道路から見学することができます。



追手門学院小学校は西日本最古の私立小学校



豊臣時代の石垣(おうてもん石垣ギャラリー)

### なぜ大阪城公園駅を高架にできなかった？

JR大阪環状線の大半は高架ですが、森ノ宮駅から大阪城公園駅の区間だけは地上を走っています。戦時中、この辺りには陸軍砲兵工廠と呼ばれる兵器工場が多くあり、高架にすると上から覗かれて軍事機密が漏れてしまうという理由で軍部が反対したからです。この区間だけ電車が地上を走っているのは、戦争時代の名残だったのです。



大阪城公園駅(JR大阪環状線)



地上を走る電車(大阪城公園駅近く)



### 番組でチェック！

- 金明水井戸の調査で発見された意外なモノ (前編)
- 石垣に「人面石」を組み込んだ意味とは？ (後編)
- 天守閣を背景にして結婚式が挙げられる！ (後編)
- 大阪城に今も残る戦争の爪痕 (後編)

右記のQRコードを読み込むか、当協会ホームページにアクセスしてご覧ください。  
<https://www.osaka21.or.jp/>

前編



後編



村瀬哲史(むらせ あきふみ) ▶ 東進ハイスクール東進衛星予備校 地理講師  
「楽しく学ぶ地理」をモットーとした授業で学生に大好評。  
一度観ると忘れられない！ そんなキャラクターでテレビ・ラジオでも活躍中！



## 開催レポート

関西・大阪21世紀協会は、「助成と顕彰」、「関西・大阪ブランドの発信と発掘」、「伝統の進化と創造」の3つを事業の柱としています。この趣旨に基づき、各団体開催の催しなどの協力や後援も行っています。

### MUFG Kids Program～異国の楽器でオリジナル音楽をつくろう！

(2023年3月19日／三菱UFJ銀行大阪ビル本館 1階ギャラリーラウンジ)

◆企画・実施協力：公益財団法人 関西・大阪21世紀協会

関西・大阪21世紀協会が「架け橋」となり、関西・大阪を中心に活動するアーティストと文化芸術活動の実施を希望する団体を繋ぎ、文化芸術の活性化を図る「架け橋事業」。三菱UFJフィナンシャル・グループが地域の方々に向けて開催するイベント「MUFG Kids Program」に、インドネシア伝統芸能団Hanajoss※を紹介し、企画協力などを行いました。



伝統楽器を使用した作曲の様子

当日は、インドネシアの国や文化の紹介と、ガムランと呼ばれる伝統楽器を使ってオリジナル音楽を作りました。参加者の皆さんは、佐々木宏実さんの指揮のもとで楽器を使い、曲のテンポを変えたり、繰り返し部分を作ったりして、あっという間に1曲を完成させました。最後は全員



完成した音楽に合わせた馬踊りの様子



ローフィット・イブラヒムさん(左)と佐々木宏実さん(右)

で演奏し、ローフィット・イブラヒムさんが曲に合わせて「馬踊り」を披露。参加者は「楽しかった」「こんなに簡単に曲が作れるんですね!」と、笑顔で語りました。

※インドネシア伝統芸能団Hanajoss(ハナジョス)

メンバーはローフィット・イブラヒムさんと佐々木宏実さん。2002年インドネシアのジョグジャカルタで結成。2005年から日本に拠点を移し、大阪を中心にさまざまな地域でジャワの伝統音楽ガムランと影絵芝居ワヤンの上演を中心に活動。ジャワ舞踊サークルやジャワ語の勉強会、インドネシア料理講座なども開催している。

### 国指定重要無形民俗文化財 住吉大社 御田植神事 (2023年6月14日／住吉大社)

◆共催：公益財団法人 関西・大阪21世紀協会

穀物の豊かな実りを祈願する御田植神事は、摂政11(211)年、住吉大社御鎮座の際、神功皇后が住吉大神にお供えする神田を定め、長門国(現在の山口県)から植女を呼び寄せて御田植の奉仕をさせたことが始まりといわれています。その後、堺の乳守の遊女が植女となりましたが、明治時代に入って植女の派遣が中断し、加えて御田が民間に払い下げられて神事は廃絶の危機に瀕します。こ



御稔女による神田代舞

の窮地を救うため、大阪新町廓が御田を買い上げて住吉大社へ寄進。また植女の儀も復興され、以来、今日まで大切に受け継がれ、昭和54(1979)年には国の重要無形民俗文化財に指定されました。



御田植奉仕をする人たち

住吉大社の御田植神事は、儀式を簡略化せず厳格に伝承されており、日本の三大田植祭の筆頭とされています。粉黛・戴盃式(非公開)を済ませた御稔女たちは、第一本宮での本殿祭の儀を経て、八乙女、植女、武者、踊り子などに扮した一行とともに御田へ向かい、御田に設けられた舞台では、巫女による田舞(八乙女舞)や御稔女による雨ごい祈願の「神田代舞」などが奉納されました。昨年はコロナ禍で規模を縮小しての開催でしたが、今年はすべての行事が復活しました。

関西・大阪21世紀協会は、大阪の誇るべき伝統文化・神事芸能としてこれを支援しています。



早苗を受けて御田へ向かう植女



## 日本万国博覧会記念公園シンポジウム2023

### 「日本人」の内と外 ― 異文化接触を語り合う

1970年大阪万博およびそれ以後の50年間の日本における異文化接触とその受容のあり方を検証し、日本人にとっての「内」と「外」の認識をあらためてふりかえるとともに、これからの時代に求められる私たちの世界とのかかわり方について考えます。

**日 時**：2023年10月28日（土）13時30分～16時30分（開場13時）  
**会 場**：国立民族学博物館 みんなくインテリジェントホール（講堂）  
**定 員**：350名（要事前申込・先着順）  
 ※千里文化財団のWEBサイトでライブ配信あり。申込不要。

**参 加 費**：無料

**受付・詳細**：[https://www.senri-f.or.jp/expo\\_symposium2023/](https://www.senri-f.or.jp/expo_symposium2023/)

**お 問 合 せ**：公益財団法人千里文化財団

TEL：06-6877-8893（土日祝を除く 9時～17時）



**主催**：公益財団法人千里文化財団

**共催**：大阪府、国立民族学博物館

**協力**：公益財団法人関西・大阪21世紀協会

**登壇者** 橋爪 節也（大阪大学名誉教授）、井上 章一（国際日本文化研究センター所長）、ウスビ・サコ（京都精華大学全学研究機構長）、吉田 憲司（国立民族学博物館長）



## art bridge

もっと身近にインクルーシブアート



貸出予定作品：有田京子「てんてんおぼけ」

関西・大阪21世紀協会は、アート作品の貸出しを通じて、多様性を尊重し支え合う、生き生きと暮らせる社会の実現を目指すプロジェクトを、この秋スタートします。

art bridgeには、アートによって作者と社会のつながりを広げていきたいという思いが込められています。

本プロジェクトは、障がいのある方を中心とする多様な背景を持つ作者の、力のあるアート作品を貸出し、身近に置いてもらうことで、その多様な感性に触れ理解を深めてもらうとするものです。

貸出しの際の負担金の一部を作者に還元することで、障がいのある方の自立支援等にもつなげていきます。

アートを介して、みんながお互いを尊重し支え合う、インクルーシブな社会の実現に貢献していきたいと考えています。



詳細はWEBにて（11月頃公開）  
[art-bridge.jp](http://art-bridge.jp)

いのちをつなぐ

Supported by **SARAYA**



Arts Support Kansai



こちらから簡単に  
寄付ができます



### アーツサポート関西の芸術・文化支援

HEART & ARTは、アーツサポート関西が進める芸術・文化支援のためのご寄付を集める取り組みです。お寄せいただいたご寄付は、アーティストや文化団体支援に充てられます。みなさまからのご寄付をお待ちしています。

寄付には税の優遇措置が適用されます。

HEART & ARTは公益財団法人関西・大阪21世紀協会が行うアーツサポート関西の取り組みとして行われています。

詳しくはアーツサポート関西ホームページへ ▶ <https://artssupport-kansai.or.jp/>



関西・大阪21世紀協会賛助会員  
入会のお願い

関西・大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

**会 費**（何口からでも結構です）

■法人会員 1口につき年会費10万円

■個人会員 1口につき年会費 1万円

**特 典**

1. 協会が発行する刊行物の配布
2. 協会が主催する各種セミナーなどへの案内
3. 賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

**お問合せ**（公財）関西・大阪21世紀協会 総務部（TEL.06-7507-2001）